〈布置図（コンフィグラツィオーン）〉の海へ漕ぎ出すために

三原弟平『思想家たちの友情——アドルノとベンヤミン』（白水社，2000年）

柳橋大輔

「海へ！ 海へ！」子供のころ読んだある本のふしぎな少年たちは叫んでいた。

アルベール・カミュ[1)]

本書は12の章と付録「クラカウアーの友情論について」によって構成されている。いまここで，便宜的にこれらの章を内容的に整理してみるとするならば，おおよそ次のような5つの節が析出されてくることになるだろう。以下，本稿はこの分割法を適宜利用しつつ書き進められてゆく。

Ⅰ：〈友情〉原理論（1～3）

Ⅱ：対人関係におけるベンヤミンの個人的性癖（4）

Ⅲ：ベンヤミン思想のアドルノや彼のゼミ学生への流入（5～7）

Ⅳ：ブレヒト-ベンヤミン関係とその波紋（8～10）

Ⅴ：1940年，ベンヤミンの自殺まで（11～12）

仮に「原理論」と名づけたⅠの部分と巻末付録とを除けば，本書の叙述は概して通時的に進められてゆくのだが，その時間軸を提供しているのはベンヤミンの生が描く軌跡である。つまりギュムナジウム以来の友人だったH. W. ベルモーレとの1910年代後半における突然の絶交のありさまを彼が終生持ち続けた「癖」・〈反復強迫〉として描き出す第4章「癖物語」（Ⅱ）から，「夢のなかまで追ってくる」（71頁）怖るべき弟子／友人アドルノとの関係（とりわけⅢ）や，ブレヒトとの〈礼〉を仲立ちとした〈友情〉（Ⅳ）を経て，1940年9月末の亡命途上での自殺への経緯を叙述する第12章「マルセイユの日々」（Ⅴ）に至るまでの道のりを，著者は様々にカットバックを織り交ぜながら跡付けるのである。

とはいえ，「本書においてぼくの興味があるのは，ベンヤミンという一個の人間ではない。彼の生涯の伝記を描こうという意図はない」（42頁）。したがって『思想家たちの友情』が主たるテーマとするのは，ベンヤミンやアドルノを始めとする同時代の思想家たちが，未だその身体的生を享受していた時代にあって，いかなる関係を，とりわけ〈友情〉関係を，相互に結んでいたのか？　という問いにほかならず，本書はこの問いに，単に理論的な側面においてではなく，むしろ鮮やかな具象性をもって回答を提出する試みである。

こうした著者の基本的態度は，特定の思想家個人をめぐる伝記的研究の拒絶という消極

1)『夏』滝田文彦訳（『カミュ全集』7，佐藤・高畠編，新潮社，1973年，121-185頁），183頁。

的な意志によってのみならず，方法論上の根拠によって積極的にも裏付けられている。というのもIにおいて語られているように，「とにかくぼくらにはベンヤミンだけ，アドルノだけの個別研究では事はすまされない[…]。彼ら自身にも，精神的な方陣を組んで，星雲状の思考を行なっているという自覚はあった」(25頁) のだから。ここで特権的な機能を帯びて立ち現われるのは，この引用にもある〈星雲状の思考〉や，〈布置図(コンフィグラツィオーン)〉・〈地と図の変換〉といったタームである。ベンヤミンのUrbekanntschaftという有名な形象を紹介しながら「主体はなく，あるのはインターコースの束だけ」(42頁) なのだと呟くここでの著者にとって，これらの用語は，ベンヤミンやアドルノといった「思想家たち」の存在を前提とし，彼らのあいだに二次的に構築される関係性を〈友情〉と呼ぶ，という通例想定される手続きの転倒をこそ意味しているだろう。著者がクラカウアーの，いささか教養主義的で「平俗」(220頁) ではあるが，アドルノやベンヤミンと「思想的空気(クリーマ)」(30頁) を分有しているはずの二つの友情論，「友情について」ならびに「友情についての考察」を，本書の主題〈友情〉をめぐる「白地図」(30頁) として導入する所以である。

こうした脈絡を最も鮮明に形象化しているのは，ベンヤミンの反語的書物『一方通行路』に含まれている断章「ビールスタンド」をめぐる一節である。下級船員たちにとってはそれ自体自分たちの住む「一つの都市」であり，世界各地の港町がそこでバロック的無秩序のもと縦横無尽に接続しあう「離接的綜合」(ドゥルーズ／ガタリ) の空間以外の何物でもない海という場に，著者は〈図〉へと〈変換〉すべき〈地〉を認めるのである。「ベンヤミン，アドルノ，クラカウアーといった個人の伝記は，それぞれ確固とした陸地のうえに現われているのではない。彼らが何であるのかということは，さまざまにインターコースの束が交錯する，通路としての海のうえに現われているのである」(44頁)。

この海の上に「白地図」を広げようとする著者が描き出す〈思想家たちの友情〉はしかし，何らかの新たな局面をうち開くものとは言い難い。[2] 本書を貫く通時的叙述の基本的プロットをなすベンヤミンとアドルノとの関係において，前者は後者にとって無二の思想的源泉となる一方，後者は常に下流にあって，源泉から流出する謎めいた言葉の数々を受けて比類のない精確さで回転し続ける水力発電装置となるだろう。しかしベンヤミンのブレヒトとの邂逅によって状況は一変し，その源泉を「破壊的」に混濁させた咎によりアドルノらはこの関係を劇越に告発するが，この「粗野な思考」の持ち主との〈友情〉は実は〈礼〉＝距離を媒介とした「ゆかしい，思いのいきとどいた友情」(136頁) だった……。

しかも，本文の叙述のレヴェルで実際に使用される白地図は，「付録」として巻末に追いやられてしまったクラカウアーの論文ではない。というのも，本書の採る方法＝〈地と図の

2) ただし，ベンヤミンと「破壊的性格」の持ち主ブレヒトとのあいだの関係が常に〈礼〉を，つまりは距離を挟んだそれに他ならなかった，という指摘が新鮮に響いたことを言明しておかなければ公正さを欠くというものだろう。というのも評者は，たとえば『ベンヤミン著作集』(晶文社) 第9巻「ブレヒト」所収の「ブレヒトとの対話」ならびに第15巻「書簡II 1929-1940」に収められたブレヒト宛書簡において，「君」と呼びあっている彼らのあいだに高度の親密さを感じ取っていたからだ。言うまでもなく原文において彼らは互いにSieという敬称で，〈礼〉をもって呼びかけあう。

変換〉を可能ならしめる〈布置図〉としての地図は，主にベンヤミンのテクストにおける諸モティーフや方法論から導出されているからである。そもそもベンヤミンこそが本書のもつ〈友情〉というテーマの中心に位置する人物だったことは次の二文からも明瞭に看取しうる。「三人［ベンヤミン，アドルノ，クラカウアー］のなかで，［…］最も豊かな友情観の持ち主であったのは，ぼくにはベンヤミンだったように思われる」(38 頁)，「ベンヤミンにとってこの世とは，友情をまっとうさせるための舞台だったのだ」(192 頁)。したがって，本書が有する（意図せざる？）意図はつまるところ，ベンヤミンのテクスト中に由来する語彙や方法論によって，ベンヤミン（ら）自身を自己言及的に「研究」すること，あるいは少なくともその萌芽を提出することだということになる。

しかし以下に見るように，〈布置図〉としての関係性というベンヤミンに由来する見解は方法論としては放棄される一方，関係以前の位相を前提とした「主体」的〈友情〉観が支配的な引力を波及させ始めることになる。何故か。まずここには，アドルノをベンヤミンの受動的な弟子・〈エピゴーネン〉と見做しながら，ベンヤミン自身をややもすれば関係以前の「陸地」・第一原因として，扱う傾向が認められる。本書に登場する「思想家たち」が共有していた「思想的空気」を提示するはずだったクラカウアー論文が巻末の「付録」へと転落することでその機能を失えば失うほど，それだけますますベンヤミンはすべての動因となる不可触の神秘と同一視されることになるのだ。例えば，上記の 5 つの節の中心部に位置するIIIで話題となる〈自然史〉という理念にとって，この〈友情〉論においても不可欠な〈布置図〉・〈星座〉という概念がいかに本質的な位置価を有していたかは言うまでもないが，ベンヤミンのテクストにおけるこれらの用語の言わば本来的な意味は，ここで提示されるアドルノとそのゼミ学生エムリヒによる二つの解釈の彼岸にあってついに手を触れることすらかなわぬ圏域にその謎めいた形姿を垣間見せるに過ぎない。換言すれば，これら諸概念の〈作者〉である「一個の人間」ベンヤミンは最後まで〈布置図〉としての地図の上に現われることがないのだ。こうして本書の方法としては無効を宣せられる〈布置図〉に代わって浮上するのは，（存在感を喪失したクラカウアーの「平俗」な「白地図」ではなく）著者が有する「エモーショナルな」(45 頁)〈友情〉観である。

つまりここでの問題は単に，「個別研究」を排し〈布置図〉を問題にするという予め掲げられた目標が遵守されていないことにあるわけでも，いわんやベンヤミン自身の語彙によって彼の現存を反省的に「研究」することにあるわけでもない。むしろ失望を禁じ得ないのは，著者が一旦はベンヤミンらの人間関係自体に〈布置図〉を認めながら，この反省を，「相対的な統一」(I, S. 75)[3] である個的存在の，「絶対的なもの」としての一次的関係＝〈海〉のなかでの「完成」＝「解消」(I, S. 78) へ導くことなく，不充分な時点で停止させることで言わば人間主義的な「陸地」に滞留してしまっているという事実にほかならない。

---

3) Walter Benjamin: *Gesammelte Schriften.* Unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt/M, 1972-1989. なお，以下本書からの引用に付されたローマ数字は巻数を表わしている。

こうした傾向の一例として，ベンヤミンをめぐる人間関係の〈星座〉を〈友情〉の名で呼ぶことへの飽くなき固執が指摘されうる。無論，ベンヤミンの周囲の「思想的空気」を代表しているというクラカウアーの友情論が明示的に扱っているこの感情の所在がベンヤミンにも認め得ることは言を俟たない。とはいえ，著者が引用するベンヤミンのテクストからは，彼がある種の人間関係を〈友情〉Freundschaft と呼ぶことを意図的に回避していたのではないかとさえ思わせるニュアンスが感じ取られるのだ。Konfiguration や Konstellation としての人間関係を標示すべくベンヤミンが用いるのは Freundschaft であるよりもむしろ Kameradschaft や Bekanntschaft (Urbekanntschaft) なのであり，また「友の足音」という訳で親しまれている箇所は der brüderliche Schritt という原文をもとにしている。しかも，本書で〈布置図〉の概念が初めて登場するアドルノ宛書簡の引用 (23-25 頁) において既に，ベンヤミンは「個人的な」〈布置図〉と「ザッハリッヒな［事柄に即した］」それを登場させ，後者に明らかにより高い重要性を付与しているのだ。これらはすべて，「人をだきとめ，人によってだきとめられるときにのみ，人は生の虚しさから救いとられ，アポリアを超え出てゆく」という「エモーショナルなつながり」の現象を「友情と名づけ」(45 頁) ようとする著者の有する〈友情〉観とは基本的に相容れない，個人間の感情的なつながり以前に存在ないし潜在するある種の事柄がうち開く関係性を，ベンヤミンが見据えていたことの証左となるだろう。著者はこうした脈絡を一度は眼に留めていながら，何故かそこからすぐに視線をそらしてしまう。ベンヤミンと〈友情〉の名で呼ばれる感情とのあいだに否定しがたく盤踞する違和感は，結局のところベンヤミン自身の風変わりな個人的「癖」(II) へと溶解するばかりなのだ。

このことはさらに，ベンヤミンをめぐる関係性の回路のなかを往復する「手紙」というメディアの考察にも当てはまる。ベンヤミン的書簡の特性描写を図る箇所 (53-60 頁) において著者は，手紙はサロンでの会話とならんで 18 世紀に全盛となった人間的関係性の形式であるという吉田健一『ヨオロッパの人間』における記述を援用し，[4] アドルノの「手紙の人ベンヤミン」を引きながら，ベンヤミンの書簡は「彼の〈声〉の直接性によって異化されたものであった」と述べ，さらには「[…] 交友や書く姿勢をも含めたその［ベンヤミンの］生き方の淵源は，18 世紀ヨーロッパにあった人だったよう」(60 頁) だという感想を漏らす。しかし，用紙選択の重視といったベンヤミンの書簡執筆における「儀式性」はこの媒体が「主体」以前にもつ間接性の意識と不可分であったろうし，またアドルノはここで言及されているエッセイの引用されていない箇所で，「僕の筆跡が何物も気取られぬようとり

4) 吉田健一のこうした発言を引用する背景として，著者はあるいはハーバーマス『公共性の構造転換』の一節を念頭に置いていたのかもしれない。その第 2 章第 6 節においてハーバーマスは 18 世紀の「私人たち」が形成する「『純粋に人間的な』関係」の文学形式として往復書簡を挙げ，この「手紙の世紀」において手紙は主体性の「『心情の吐露』の容器」であり「魂の生き写し」「魂の訪れ」と見做されていたと述べている。ベンヤミンが手紙を取り扱う際の「儀式性」は，こうした透明性のメディアとしての手紙と比較すべくもあるまい。Jürgen Habermas: *Strukturwandel der Öffentlichkeit.* Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft. Mit einem Vorwort zur Neuauflage 1990, Frankfurt/M, S. 113.

わけ気をつけている」という言葉を，自身秀れた筆跡学者だったベンヤミンの発言として報告してもいるのだ。[5] こうしたベンヤミンの書簡媒体に対する態度と18世紀的な主体的直接性のメディアとしての書簡観とはそもそも両立可能なのだろうか。

これら人間主義的な関係性解釈の延長上で，著者は同性間の関係と異性間のそれとを画然と分かち，後者を〈異性愛〉と名づけつつ〈友情〉を扱う本書の領域内から周到に排除しようとする。その論理は次の通りである。ベンヤミンにとっては「異性愛よりも友情のほうが」「より震撼的であった」(39頁) のであり，というのも「[友情と] 同じくアポリアを乗り越える異性愛のほうは，燃え上がるその火勢こそ烈しかろうと，[…]，いずれは『崩壊』してゆくのにたいし，友情のほうは『生涯にわたって』ということも可能」(45頁) なのだから。こうした根拠づけの作業はおよそ成功から程遠い。ベンヤミンにおいて時間軸上における持続性の多寡が何らかの事柄の重要性の論拠となったことがどれほどあるものなのか，評者には見当がつかない。新しい天使たちはその瞬間的な出現においてこそ比類ない価値を有するものと見做されていたのではなかったか。こうした当然沸き上がる疑問に対して本書はわずかに付録部分において，クラカウアーの友情論がもつ異性間ないし女性同士の〈友情〉を軽視する傾向を，その1920年代の性愛的パラダイムのもつ歴史的限界と見做す指摘を用意しているに過ぎない。クラカウアーの論文のような20年代の「平俗」で一般的な〈友情〉観に定位しつつ，その「白地図」からベンヤミン的モティーフに即して構築された関係性（〈思想家たちの〉友情）を浮上させようとしたはずの本書の試みは，畢竟彼らの同時代において漠然と共有されていたシェーマへ，またその「白地図」としての存在感が低下したのちには著者自身の〈友情〉観へと，この関係性を回収してしまう結果を生んでしまってはいないか。

しかし，本書に潜む〈ホモソーシャル〉(セジウィック) な視点をフェミニスティックに批判することは我々の当面の課題ではない。さしあたり，古くは「フリードリヒ・ヘルダーリンによる二つの詩」に「関係の専制的支配」ないし「完全な受動性」(II, S. 124f.) として登場しているこの〈布置図〉のテーマを，断章「ビールスタンド」における〈離接的〉関係性としての海へと導いた道＝『一方通行路』をベンヤミンの内部に切り開いた女性アーシャ・ラツィスが，本書にほとんど登場することがなかったという事実を想起しておけば事足りる。彼女の存在は，本書において不可触の神秘へと置き入れられたベンヤミンの，関係性内における「受動性」を議論の俎上に上せるための有効な形象の一つたりうるだろう。例えば『一方通行路』というテクストを牽引する概念の一つ〈神経刺激〉Innervationを〈布置図〉の系列に新たに付加し，ベンヤミンの身体的「震撼」を考察の対象とすることで，一連の関係性概念を彼（ら）自身へと，真に適用する可能性の出現を見ようとするのはあまりに楽観的な振舞であろうか。無論その場合〈思想家たちの友情〉というテーマ設定を維持することは困難をきわめることとなるだろう。

---

5) Theodor W. Adorno: Benjamin, der Briefschreiber. In: ders.: *Über Walter Benjamin.* Frankfurt/M, 1970, S. 81

周知のように引用だけで構成された書物を夢見たベンヤミンは現在，様々な文脈で最も頻繁に引用される著作家の一人となっているが，彼の用いた語彙をあえて彼自身をめぐる人々の関係性へと適用することを目指した本書の試みは，こうしたベンヤミンの〈リサイクル〉に逆行するヴェクトルを取ってはいるだろう。また本書はこの試みに必ずしも成功せず，最終的にはこの関係性にまつわる諸事実をある種の人間的共感をもって叙述する身振りに終わってしまっているかもしれない。こうした側面への批判をその主調音とすることになった本稿はしかし，繰り返すが，このヴェクトルそのものを問題視していたのではなかった。むしろそれが遠く指し示す〈作者〉ベンヤミンという存在の内破へ，「海へ！」と挑発することこそが，「陸地」から〈布置図〉を経て神経のネットワークへ，という危なげな航路を辿ることになった本稿の最終的な寄港地だったのである。しかしこの「交錯した港は，もはや決して故郷ではなく揺籃なのだ」(IV, S. 145)。